れた。足は既に紫色に内出血し、足首はボンポンに腫れ、友の肩に乗って下山したが、医師も薬もない山中、テント内で患部を水で冷やすのみ。以後二か月、友が作業に出ていったテント内でただ一人、痛い足をかばいながら、点々と移動するたびに友の肩を借りる始末。このときばかりは何度自殺を考えたことか。

やがてこのつらい生活も終わるときが来た。完治不能かとまで思っていた左足も、月日という薬のお陰で、ビッコを引きながらもどうやら一人歩きができた。いよいよナホトカへ出発という列車に乗り、昭和十八年以来四年ぶりの海を眺め、日本輸送船の姿を見たときは、うれし涙がこみあげ、夢ではないかと疑った。

昭和二十二年十月末、日本では収穫の秋さ中というのに、ここナホトカはもう寒い、広い砂浜一面に張り巡らされた無数のテント。この中で乗船まで、再度の共産主義教育が日本兵の手によって行われた。いまさら批判しても、また反対意見を述べようものなら、お前はまだ反動だと言われ、ダモイに影響があるかも知れぬ。「君子危うきに近よらず」……十月二十日、いよいよ乗船、私はまだ全治していない左足を引きずりながら、それでも、さも何もない風をして、わざと元気そうな足どりでタラップを登った。

船は恵山丸、船腹いっぱいの帰還兵を乗せ、ゆっくりと動き出した。二度と再びソ連へ来るものか、シベリア向いて小便もするものか、喜びと怒りの交錯する複雑な気持ちで、二日間の船中の人となった。故郷の父母やいかに、望郷の念一しお、十一月二十一日、懐かしの舞鶴港に上陸した。「国敗れて山河あり」この瞬間ことわざの読み替えを実感したのは私一人ではないだろう。

戦い・捕られ・還った・茨の道

島根県　松浦　進

我々一〇七師団一万三千余人は、昭和二十年早春、満蒙守備のためハルピンを発って五叉溝に移駐を始めたころ「祖国日本危うし」の気配が漂い、ソ満国境も緊張がみなぎり、ついに八月九日、ソ連機甲軍団が大挙来襲

し、朝もやに覆われていた興安嶺山麓は修羅場となり、弱装備と孤立無援の日本軍は挺身奇襲で応戦するも、窮地に追い込まれていた。はからずも十二日、関東軍司令部から「陣地を撤収し、新京に集結せよ」との指令を最後に通信連絡は途絶えた。しかし退路には敵大部隊が待ち構えており、総攻撃を展開し、強行突破を敢行したが成功せず、各隊は活路を求め十四日、カチューシャの曳光弾や親子爆弾に追われながら、多数の戦死者を残し、後髪ひかれる思いで、夜のとばりの中を深山幽谷に退避した。終戦になったことも知らず、泥水すすり草をかみ、新京へ向け一千キロの難行軍を続け、二十八日、遥か西方の峯伝いに「成吉斯汗畳跡」を望む高原の台地が開けた音徳爾に主力が集結したが、残念なことに開戦時兵力の三割を失い、痛恨の極みであった。

ここには内蒙自治区公署があり、物資の集散地として栄えていた集落であったが、戦火を知るや、今では無人と化していた。幸い穀物や家畜が大量に残されており、空腹を満たすことができた。しかしまたしても難関に直面した。それは我々が進路としていた王爺廟一帯はすでに敵が占拠し、満軍も寝返った模様で新たな精鋭部隊が接近中との情報を騎兵隊が伝えた。事ここに至っては、最後の決戦を挑み、全員玉砕覚悟で時機到来に備え、緊迫していた。そのとき澄み切った青空に日章の小型機が突如姿を現わし、待望の友軍機来援に歓声を挙げた。しばらく低空を旋回し、山裾に強行着陸し、日ソ両軍参謀が真っ先に飛び降り、安部孝一師団長と会見「日本の無条件降伏と戦争終結したことを伝え、即時停戦するよう説得した」。

やがて白旗を掲げた軍使が敵陣地に急行し、夕やみ迫るころ夏草生い茂る原野で、武器、弾薬、軍馬、車両ことごとくソ連軍に渡し、武装を解除し「最後まで戦った関東軍の幕を、由緒あるこの古戦場で降ろす役目を果たした」。以来幾千人の捕虜たちはソ連警戒兵に身を任せ、すり減った靴に破れた軍衣脚絆をまとい、寒暖差の激しい大陸の厳しい気象と、時計・万年筆を狙う無頼漢どもに悩まされ、行き先き知れず北満の広野を歩き続け、木枯らし吹きすさぶ十月、斉々哈爾の旧軍兵舎に辿り着いた。この街はかつての軍隊生活を過ごした思い出の地だ

が、今では主は変わり、マンドリン銃を構えるソ連兵士を見て、敗者の惨めさと口惜しさに胸が痛んだ。続々到着する同胞の集団で、収容所は混乱を極め、また初めて口にした麦穀のまじった黒パンの酢っぱい味には驚ろいた。

数日滞在し、防寒の装いで千人の戦友たちと貨物列車の蚕棚に詰め込まれ、十一月三日、国境の町、満州里を通過し、初めてシベリアへの旅とわかった。殺風景な雪原を小窓から眺め、そのうち小さな停車場で全員下車させられた。後日「チタ州ハラグン」という寒村と知った。この夜は零下二十度に達する寒気にさらされ、みな肩寄せ合って野宿し、夜明けを迎え軽食を済ませ、膝まで没する雪をかき分け、人里遠く離れた奥地へ難行苦行、やっとのことで原始林に囲まれた雪原で隊列は止まった。見渡すと、有刺鉄線柵と見張りの望楼だけで、ほかの施設は何もなかった。先導した指揮官は勝ち誇ったような口調で「君たちの越冬地に到着した。明日から宿舎を建てて住め」と命じた。どの顔も延び放題の髭は白く凍てつき、放心したように背負っていた荷をおろした。直ちに日本人技術者で建設計画を立て、「生きて祖国の土を踏むまでは頑張ろう」の合言葉で突貫作業を昼夜兼行し、十日間ほどで半地下の丸太組み防寒構造の建物が数棟完成し、風雪を遮えぎることができた。

十二月のシベリアは零下三十度を越す酷寒期に入り、またしても制裁を受けた。それは恐るべきノルマを科した伐採労働と、食事は生命維持の最低限界量だった。毎日の献立は朝、凍ったパンひとかけらと菜っ葉の塩汁飯盒ふた一杯分。昼、米か粟の重湯と飯盒三分の一ずつ分けて飲む。夜、米かコーリャンの飯を飯盒ふた八分目と親指大の肉か馬鈴薯の煮つけ三、四個。栄養失調と疲労困憊、その極に達し、顔はたき火のすすで真っ黒、眼は鋭く光り、吸血鬼シラミは猛繁殖し、無言の表情は生ける屍であった。不幸に枯れ木の折れるごとく、凍土に骨を埋め「故ナニナニの墓」とダビの木炭で書かれた墓標は、二十年暮れから日ごとに数を増し、翌年三月までに三百余柱の尊い犠牲者を出した。

嵐もおさまり、ようやく春の息吹きを感じた二十一年五月、全員山を降り、再び貨車に乗った。さては待望の

帰国かと心弾んだが、非情にも列車は西へ西へと走り、バイカル湖、ウラル山系を越え、遠く東欧の都市ウファ収容所に送られた。ここでは人道的に寛大な扱いを受け、思想的な強制も洗脳もされず、民族的な偏見のない人々の心温まる好意にも接し、三年の歳月を平穏に暮らすことができた。そして昭和二十四年、長く辛かった茨の道を越え、鶴が舞うという祖国の岸壁に上陸することがかなえられ、七月二十四日、八年ぶりに松江駅頭に降り立ち、家庭や懐しい人々に迎えられ、再会を喜び合った。ちょうどこの日は天満宮の夏祭で賑わっており、子供時代の楽しかった思い出もよみがえった。

生き残った老兵は想う「不戦こそ人類幸福の礎である。悲惨な戦争体験を後世に語り継ぎ、二度と過ちを繰り返さぬための由もがなともなれば幸いである」。

シベリア抑留体験記

岩手県　金野秀雄

収容所まで二か月余

終戦を知らずに戦った私たちは、昭和二十年八月二十九日、音徳爾で武装解除となった。

早速ソ連兵の監視でダワイダワイと追いたてられながら放浪の旅が始まったのである。

食糧も支給されずの野宿である。約八千人の部隊であり、食糧調達でたちまち四～五キロ四方の畑作、馬鈴薯、玉葱、人参、玉蜀黍等は皆無となる。二～三日すると再び移動する。六～七回繰り返して九月末日頃にチチハルの旧兵舎に宿ることができた。移動を繰り返すたびにソ連兵による略奪が行なわれ、時計はもちろん万年筆、金銭、果てはベルトまで奪われたのである。

その光影は言語に絶するものであった。山羊や羊が放牧地で追い回されている様子に似ている。チチハルの兵